

《主題別研究集会》

出版物の新しい形態と大学図書館

近畿地区国公立大学図書館協議会主催の主題別研究集会が標記テーマで昨年12月2日、大阪大学基礎工学部のシグマホールで行われた。

講師は愛知淑徳大学教授・津田良成氏、12大学から43名の参加者があった。

話は、情報技術の進歩（特にコンピュータとテレコミュニケーション）が飛躍的に進んできたときに大学図書館はどのようになるのか、という視点で進められた。

現在、日本の大学図書館がかかえている問題として件名目録の不備のほか、目的意識をもったマネジメント指向、Technologyの導入、利用者の分析にもとづいたサービス内容を検討していく事等の不足が指摘された。

Information Technologyの応用範囲は、図書館の日常的な仕事（House keeping）をコンピュータ化し、資料・情報面では二次資料のコンピュータ化（Data Base化、情報検索）、Non-book materials、特にAV（視聴覚）資料の普及、印刷物の電送化、図書館のStudy roomにNew mediaの集中をもたらし、そこでonline検索、電子メール等がつかえるようになり、さらに電子出版が実現しようとしている。

出版物の新しい形態としての電子出版（electronic publishing）は、図書館の形を変えて行くものといわれている。技術の進歩は図書館のサービスに大きなインパクトを与えてきている。

電子出版が今後の図書館にどう影響を与えるかの予測を立てることが必要となり、図書館を新築する際の留意点ともなる。

電子出版には集中方式と分散方式があり、媒体にも全く電子的なものだけで行う場合と印刷物と併用して用いる場合とがある。どの形が将来主流になるのかによって、図書館の形も変わってくる。当分は併用の形が主流になるだろう。

電子出版の利用は、VDU（Visual Display Unit）

を通して読むため、“流し見”ができないこと、約40分以上は続けて見られない等の問題もっている。反面、その利点としては多くのものもっている。例えば、出版が速い、内容がup to date、interaction、即ち、利用者のコメントを付け加えたりすることが出来易い、広い範囲の出版物にアクセスできる、集めた情報の並べ換えが容易、教育用プログラムが作り易い、増加する情報検索の蓄積に良い。図書館スペースの節約、著者と研究者の間に直接のコミュニケーションができ、これによって中間的な機関が必須でなくなる可能性、検索に適しており、また個々の人の条件に合わせたプロダクトができ、費用節減等々である。これらのことから、電子出版の普及は、研究者、出版者、さらには発展途上国にもさまざまな面で大きな影響を及ぼすこととなるだろう。

人文・社会科学は今の形の資料で残り、自然科学系の資料は電子出版に取って変わるのではないかと予測もできる。

これらのことから、図書館への影響は、電子的な将来の世界を予測しながら、直前の緊急な問題の解決を延ばして行くことは不可避である。どれくらいのスピードでどの分野が電子化されるのか見極めねばならない。今後、益々情報のoverloadになるともいわれるが、そうすると不要情報の切



り捨て、必要情報の収集と中身を濃縮して提供することが要求される。図書館員には物の管理者から情報の中へ入り主題に対する知識が要求され、利用者に対するアドバイス、利用者教育がますます重要となる。

英国での調査の結果いわれていることは、短期またはある程度の間まではフルテキストの電子化への転換はないだろう。将来の状況では、図書や雑誌は図書館におかれ、従来の方で利用されて

いくだろう。図書館に次の目玉商品であるレーザーカードがもっと使われるようになるだろうが、近い将来に伝統的な資料にとって変わることはないであろう。OPAC (Online Public Access Catalog) が全国どこからでもアクセスできることが望ましい。さらに図書館のコンピュータが大学内の他のコンピュータと互換性を持ち、ネットワークを通じて電子メールなどが使えるようになる、ということがいわれている。

《地域ネットワーク》

奈良教育大学図書館、 京大・学術情報センターと接続

昭和63年度、奈良教育大学附属図書館に電子計算機システム導入の予算が認められ、2月1日、近畿北部地区国立大学図書館機械化ネットワーク（センターは本学図書館）並びに全国の学術情報ネットワークへの接続を記念して、同大学に於いて、開通式が行われた。

式には、同大学、近畿北部地区国立大学図書館、電子計算機メーカーから合わせて51名が出席し、藤永学長および市川図書館長の挨拶、本学図書館の砂本部長および電子計算機メーカーからの祝辞のあと、システムの説明とデモンストレーションに移った。市川館長のスイッチオンにより、ディスプレイ端末に上記ネットワークへの開通のメッセージと、奈良の観光名物である鹿の絵が表示され、その後、学術情報センターと本学図書館の電子計算機システムを利用した目録検索が披露された。

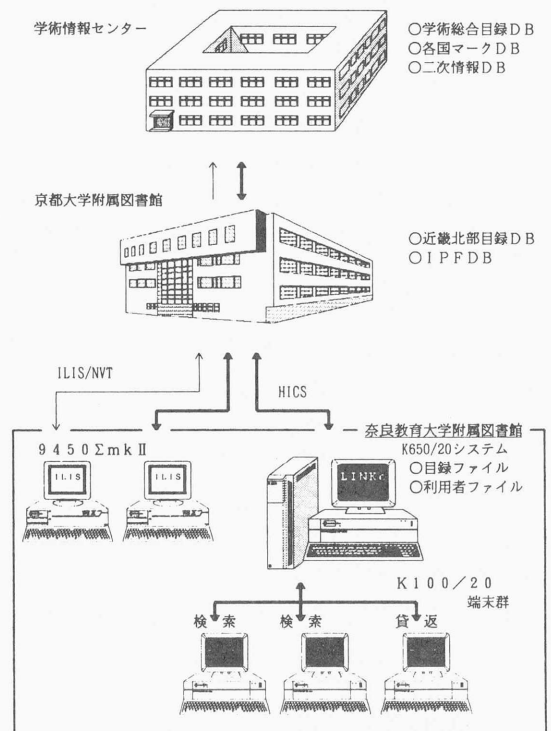
学術情報システムは全国の大学の参加の下に学術情報センターを中心に、大学の大型計算機センター（情報処理センター）、図書館、国立大学共同利用機関等をコンピュータと学術情報データ通信網で結合し、大学等の研究者が必要とする学術情報を迅速・適確に提供する、全国的・総合的な情報流通システムである。

この計画を達成するため、近畿北部地区（滋賀・京都・奈良）七大学図書館においても昭和56年に

は図書館間で組織を作り、地域ネットワークの構築を目指して活動を行ってきた。

同大学のシステム導入により、近畿北部地区国立大学図書館機械化ネットワーク参加館は、本学を除き四大学（京都工芸繊維大学、滋賀医科大学、滋賀大学、奈良教育大学）となり、残る二大学（京都教育大学、奈良女子大学）も近い将来参加する予定である。

ネットワーク構成概念図



提供：奈良教育大学附属図書館